

# 会報

〒183-8534  
 東京都府中市朝日町3-11-1  
 東京外国語大学  
 ロシア語渡辺研究室内  
 東京外語ロシア会  
 TEL&FAX 042-330-5265  
 振替口座 00110-8-22338

## 有機的な連携・協力を

亀山 郁夫



ライバル校であり、八十六年の輝かしい伝統を誇る大阪外国語大学の歴史に終止符が打たれました。大阪外国語大学と大阪大学がともに選択したこの道について、私はいま、具体的に何かをいえる立場にはありません。ただ、国立大学法人として日本に二つしかなかった外国語大学の一つが消滅したという事実を、私たちはもつと真剣に見つめ、その選択のあり方について議論する必要があると考えます。今後、私たちの大学が、人文系の単科大学として自立の道を歩みつつけるためにも、避けておろすことのできない問題です。

私はこれまで、東京外国語大学でロシア語を学んだことを大きな誇りとしてきました。その思いはむろんいまも変わることはありません。しかしこのひと月、今後の経営戦略プランを練りながら、心から願っていました。それは、自分の学び舎がいつまでも輝きを失わず、日本と世界に誇れる存在であってほしいということです。

二〇〇七年十月一日、私たちのよき

ご存じのように、現在、日本の大学は、グローバル化、少子化という二つの厳しい現実のなかで、それぞれに対応策を求められています。国内のみならず海外の優秀な学生を獲得すること

最近のロシア事情…………… 朝妻幸雄  
 ルーマニアから日本への視線… 酒井理恵  
 劣等生のロシア語劇演出………… 塚本 恒  
 府中だより… 鈴木義一 ロシア会会則…  
 会計から…二〇〇六年度会計報告…………  
 真の国際人は外語にいた！……………  
 ロシア会総会・懇親会のお知らせ…………  
 ロシア語専攻専任スタッフの紹介…………

10 10 9 9 8 7 5 2

が最大の課題です。危機感、大規模な大学であればあるほどつよく、先進的な大学が、生き残りをかけて、さまざまな改革に取り組んでいます。

この厳しい状況にあつて、どのようにして、本学のプレゼンスを、日本と世界にアピールしていくことができるのか？ 皆さんのなかには、『ブレジデント』最新号をお読みになった方も少なくないでしょう。日本社会における大学の評価をめぐる特集号に、悲しいかな、本学の名前は、わずか一行あるのみです。人文系の単科大学だから仕方がない、という言い訳も可能ですが、それにしても、寂しすぎる現実です。これは、グローバル化時代にこそ名を馳せるべき本学が、もてる実力を十分にアピールできていない証拠です。

この事態に風穴を開けるために、ロシア語の卒業生のひとりとして、ロシア会の皆さまにこの場をお借りしてお願いしたいことがあります。本学のプレゼンスのさらなる向上のために、どうか、お力添えを頂きたい。

東京外国語大学は、少なくとも受験レベルにおいては、今なおトップレベルを維持しています。ソ連崩壊後、低迷していたロシア語人気もようやく盛り返しを見せています。そして何より、ロシア語を出た多くの卒業生たちが、日口関係のみならず、日本文化の先進的な担い手としてすばらしい足跡を残してきた事実があります。この輝かしい伝統を、会員の皆さまにいまこそ再認識していただきたいのです。

今日、大学は、同窓生と一体になって未来を切り拓く時代にあります。法人化を生き抜くには、力を尽くしてみずからの伝統と高いブランド性を保持していかなくてはなりません。

この9月、私は、学長就任の挨拶として、「世界知の輝ける殿堂をめざして」という一文を掲げました。これは、本学を、グローバル化時代の世界に関する人文的知の一大センターに育てるといふ覚悟を示したものです。そしてその実現のために、「アクション・プラン二〇〇七」(HP参照のこと)を示しました。あとは努力あるのみです。

ロシア会の皆さま、今後ともどうか、たがいにお互いに連携・協力しあい、母校の将来をあたためたい目で見守っていただければ幸いです。

(昭47年卒業・東京外国語大学長)

## 最近のロシア事情

朝妻 幸雄

二〇〇〇年以降のロシア経済と  
プーチン大統領:

私が所属する日本センターのオフィ  
スには殆ど連日のように様々な経済関  
係ミッションが訪れてくれる。その人  
たちがモスクワの繁栄振りを目の当た  
りにして唖然とする表情は時として可  
笑しくさえある。これまでもち続けて  
いたロシアのイメージと実像のギャッ  
プに驚くのも無理はない。

ロシアの経済概況については、ロシ  
ア会諸氏はご存知の通りです。ソ連崩  
壊後、様々な困難と混乱に直面し、一  
九九八年の経済危機においてはロシア  
ももはやこれまでと思われた。私自身、  
それまで数々の煮え湯を飲まされたが  
ら、ここが我慢のしどころと耐えてき  
たがあの時ばかりは殆んど諦めの境地  
に陥ったものだ。しかし二〇〇〇年以  
降、ロシアは不死鳥の如く蘇った。世  
界のオイル価格は同年を境に高騰に転

じ、更に長期高値安定という心地よい  
追い風を受けてロシア丸は猛烈な勢い  
で海面を滑り出した。勿論、それまで  
の酪酊政治とカネ・コネの世界に埋没  
し、方向性を見失っていたエリツィン  
大統領からプーチンを受けて勇躍大統  
領の座を占めたプーチン大統領の功績は、  
その強運と強引な手法は割り引いても  
高く評価されなければならない。

石油ガスによる収益増という僥倖を得  
て、『国益優先』と書かれたタスキを  
肩に、『世界の強国』というゴールに  
向けて一直線にて疾駆するプーチン大  
統領の雄姿は、国民の喝采を浴びた。  
ゴルバチョフ、エリツィンの両大統領  
によって世界に恥じる弱小国として辱  
められ、失意の思いに沈んでいたロシ  
ア国民にとって、誠に小気味のよいも  
のと映った。小さなことだが今年七月  
には殆んど勝ち目が言われていた二  
二〇一四年の冬季オリンピックを強  
引にソチに引く張つてきた。これもプ  
ーチン大統領の演説と裏技(?)が奏功  
したとも言われている。このようなこ  
と一つにもロシア国民はプーチン大統  
領への信頼を深めている。在任七年半  
という短期間に国家の枠組みを再構築  
し、経済的基盤も揺るぎないものとし  
た。

なに所詮、地下資源の切り売り、売  
り食いしているだけの経済など長続き  
はしないさ、オイルが下がればそもま  
でさ、という批判的な見方もある。し  
かし、財政の中身を見る限りこれはあ

たらない。經常収支赤字は勿論、外貨  
準備高(七月二十日現在四一三億ド  
ル)も、安定化基金(※)も貯めに貯  
めて、多少の逆風が吹いても揺るぎな  
い体質を作った。そして何よりも黒字  
体質を勤労者の所得移転として経済の  
活性化の流れを作ったことである。こ  
の経済は簡単に破綻しないところまで  
行き着いたと見てよい。

※ 安定化基金: 原油1バレル25ド  
ル以上が対象となり、その90%  
が基金に組み込まれる。将来石油  
価格が20ドル以下に下落した場  
合に財政赤字を補填することになっ  
ている。本年七月現在ですでに基  
金残高は3兆ルーブル(15兆円)  
にも及んだ。

## 日本経済界の対ロ姿勢:

では日本の経済界のロシア市場に対  
する姿勢はどうだろうか。

実は依然としてロシア市場には慎重  
な姿勢を崩していない。現在ジャパン・  
ビジネスクラブに所属する日本企業  
(※)は除外しても、一般に非常に消  
極的だ。理由は三つある。①ロシア市  
場を正面から見ない企業が大半を占め  
ること、②日本の経済界固有の(リス  
ク管理の名の下に正当化される)極度  
の慎重さ、③ロシアに対する不信心、  
である。いずれも主観的要因であり、  
市場調査すら行わないところが殆んど  
だ。ロシア側企業が訪日の機会を利用

して、同業の日本企業を是非訪問した  
いと希望しても、忙しいなどの理由を  
つけて拒むところが大半である。

欧米、中国、韓国がロシア市場にラッ  
シュ後、しつかり定着して大きな利益  
を上げてきている中で、独り日本だけ  
がその後塵を拝しているのは、単なる  
不勉強による情報不足に過ぎない。ゴ  
ールドマン・サックスが注意を喚起する  
BRICsについても何故かロシアに  
ついては目を瞑る。一部の専門家たち  
が随分貴重な情報を提供しているにも  
関わらず、ロシアというだけで目を通  
そうともしない姿勢は遺憾なことだ。

ソ連時代には日本はドイツに次いで第  
二位の取引実績をもっていた。今は専  
※ モスクワに出張所、支店、現地法  
人等のオフィスを持っている企業  
の会(現在約一七〇社が加盟。本  
年三月まで商工会の名称であつた  
が、日本人会を糾合して一つの組  
織になった。

## ロシアにおける日本ブーム:

いまロシアには日本ブームが強い勢  
いで進行している。

中でも代表されるのが日本食レスト  
ランだ。もとはといえば健康志向から  
きたものだが、いまでは、流行を越え  
て殆んどのレストランの通常メニュー  
に収まりかえっている。モスクワの街  
中に寿司屋が軒を連ね、フランスレス  
トラン、イタリアレストラン、はては

ロシアレストランに至るまでメニューに寿司を並べている。寿司を置かずばレストランにあらずという表現がびつたり合う様相だ。いまやロシア料理の中に日本食が侵食して定着してしまつたとまで言われる。モスクワに日本調理師会(※)があるが、彼らも困惑を隠さない。正しい寿司、刺身とは異なるものが、日本食の名前でまかり通っており、この傾向は更に強まりつつあるからだ。

日本ブームは日本食に限らない。伝統的な茶道、活花、碁は当然として、日本の武道、それは柔道、空手、合気道、剣道などがスポーツマンたちの対象として大きな地位を占めている。勿論、トヨタを筆頭として、すべての日本ブランドの乗用車に始まり、ソニー、パナソニックなど日本のブランド商品への人気は拡大の一途だ。この機に乗じて、大使館を中心に、ロシアNIPS貿易会、日本センターやその他の組織が一緒になり、『日本の秋』という日本をアピールするイベントの企画が具体的な検討の段階に入った。

それにしても、そこまでロシア人に愛されているのに、ロシアに冷たい日本人、この片思いの構図はどこから来て、そしてその行方は？

先日、知日派ロシア人の講演会で、この時期になぜ日本はもつとブームを利用しないのかと発破をかけられたが、内心忤怩たる思いで聞いたのは私だけではあるまい。

※ モスクワの本格的日本レストラン

の調理師や寿司職人で構成される組織23名、小生が顧問を勤める。

これからのロシアに対する見方：

ロシア経済は大別すると、プラスとマイナスの二つの要因に分けられる。

まず、プラス要因から。ここでは紙面の都合上、数表やグラフは割愛するが、経済成長率の高さと、天然資源の埋蔵量、国民の教育レベルの高さと勤勉性を見れば、時を経ずして世界の経済大国にのし上がる可能性は極めて高いと言える。ゴールドマン・サックスが指摘する二〇五〇年を待つ必要もないだろう。今年七月には経済発展貿易省のグレフ大臣が、長期発展計画の中で、二〇二〇年には世界第四位以内に食い込むと宣言している。遅ればせながらも国を挙げて始動したインフラ整備、地方経済の底上げ政策、企業のイノベーションの推進も注目に値する。同省の次官よりその詳細を入手したが、よく検討されている。更に注目すべきことはロシアが欧米企業の株取得、企業買収・提携に参入していることである。

そして静かに日本の証券界にも狙いを定めて、企業買収をも視野に入れている。(一部ですでに始まっている。)日本がロシアを見ていない間に、ロシアは肅々と日本の経済への参入をはじめているのだ。

昨今、日本センターはロシアの投資ファンドや有力企業よりこの手の相談

を受け、頻度が増えてきた。こうした傾向を迎撃するには日本から積極的にロシアに進出して協力体制を作ることだ。少なくとも対処療法にはなる。

マイナス要因とは、今後のロシアの政治経済への懸念だ。それはまず、ロシアの汚職退治の遅れについて言及せざるを得ない。たとえば外国人投資諮問評議会(FIAC)が昨年発表した外国企業の年次調査報告によれば、ロシアの最大の投資障壁について、回答者のうち84%が過度の許認可事項と役割所仕事を挙げている。この苦情リストには更に、汚職78%、不十分で矛盾した法律71%、法の選択的適用67%を指摘している。

新生ロシア発足後15年を経ていながら、何故こうした原則的な問題に対処できないのか。プーチン大統領の強権をもつてすれば、比較的短期日に出来ることなのになぜ本格的に手をつけられないのかという疑問を呈する外国人は少なくない。法の正義を標榜する大統領の法律とは、ロシア企業にとつて都合のよい法律のみを意味するのか。また法律の曖昧さが俗人的な解釈を許し、不誠実なロシアビジネスマン達には誠に居心地のよい環境を作り出し、汚職を生むことに繋がっている。税関における汚職も明らか。在モスクワ日本企業によるビジネスクラブにおいても関税委員会に繰り返して善処を求めているが解決に結びつかない。因みに、税

関員をはじめ公務員の給与を上げることによつて改善されるという説もあるが、私はそうは思わない。多少給与を引き上げても解決にはならない。ロシアにおいては一罰百戒をもつて臨むことが最も早い解決の道と考えている。

それが意を得たり、と思われれば日本の企業経営者もいるかも知れない。しかし、それも所詮ロシア市場を軽んじて、他国がこの釣堀で大漁を楽しんでいるのを看過し、益々機会を失うだけのことであることには変わりはない。

日本センターのセミナーと訪日研修：

『諸君、心の準備はできていますね。これから数時間後には諸君は日本に向けて研修の旅に出発します。一般の経営者養成セミナーの結果、諸君は優秀な成績をおさめたので日本で継続して学ぶ機会を与えられました。セミナーで学んだ内容に加えて更に三週間みっちり学習してきてください。日本でのプログラムは手元に配つた資料にあるとおり盛りだくさんです。』これは毎回の日本センターによる経営セミナー実施の数週間後に行われる訪日研修壮行会における私の激励の言葉だ。セミナーの受講者一〇〇名の中から厳しい審査の結果選ばれた20名を送り出す簡単な儀式だ。

日本センターについてご存知ない方のために簡単に説明しておきたい。

一言で申せば日本政府がロシア経済の市場経済化促進を支援するためのプログラムの一環として立ち上げたものだ。ロシアが社会主義経済を捨てて市場経済の仲間入りをしたのはたいへん結構、また民営化した企業や仲間同士で立ち上げた新興企業ができたのはいい、さてそれらの経営者たちにとって、その先一体どうすればよいのか見当がつかない状態であった。ソ連時代は共産党の命令による生産量割り当てがあり、

企業長はそれを超過遂行したという虚偽の報告を繰り返してきた杜撰な経営の繰り返しであった。それどころか経営などと呼べない代物であった。企業決算の実態はその報告と著しく異なるものであった。こうした粉飾決算の積み重ねが現実と実態の乖離を拡大してついに社会主義ソ連破綻の主因であったことは知られている。

弱な中・東欧を津波のごとく呑み込み、更には、膨大な数の棄民、難民が西欧諸国に押し寄せる可能性は現実的な予測であった。

前置きが長くなったが、実はこうした中で一九九三年のG7においてロシア支援が申し合わされた。そして翌一九九四年日本センターの第一号が日本外務省によってモスクワに設立されたのである。その後順次支部が設立され、現在六都市七センターが存在する。ロシア各地の企業経営者やその予備軍、あるいは将来日本とのビジネスを行う可能性を持つビジネスマンを集めて日本で培われた経営手法、哲学、ビジネスの手法などを数多くのテーマに載せて伝授してきた。これまでに七つの日本センターによって実施された経営セミナーに参加したロシア人たちは約三万八千人、そのうち訪日研修に参加したものは約三千人に達した。実はロシア側でも、経営者の教育の重要性に気がつき、遅ればせながら一九九八年に経営者養成のための大統領プログラムを批准し、その実行機関である経営者養成委員会が設立された。それ以降、同委員会は独自のカリキュラムで基礎教育を行い、また日本センターや欧米の政府組織と提携して、外国での研修を実施するようになった。

なお、日本センターにはもうひとつの重要な課題がある。日口間のビジネスを一層活性化するために、日本企業

とロシア企業を支援することである。具体的なビジネスの提案を受けて、その内容に相応しいと思われる相手国企業を探し当てて、可能性があればお見合い(最初の面談のアレンジ)をさせる。うまくいけばデート(商談)をさせ場合によって結婚式(契約書、協力協定所などの調印式)にまで立会う。上記のプロセスを総称してビジネス・マッチングと称している。なお、二〇〇四年に日露貿易投資促進機構が発足したが、日本側からは経済産業省、外務省の他にロシアNIS貿易会(ロシア東欧貿易会が改称)、JETROと共に日本センターが構成組織になっている。両国企業に対する、情報提供、コンサルティングなどが主な業務だが、上述した具体的ビジネスの実現にも深く関わっている。弱い日口経済関係を補強するのが目的だ。

また、日本センターは日本語の授業を行っており、主としてビジネスマンを対象にして徹底的な日本語教育を行っている。両国の対話の幅を広げるのが本来の目的だが、昨今では日本企業の進出がラッシュしている中で、多くの企業の出張所より日本センターに対する人材派遣の要請は増える一方だ。その60%が日本語卒業生を希望している事実に向向きに対応する必要性が益々強まっている。

日本センターの同窓会について:

実はセミナー参加者や訪日研修生たちは、帰国後、単に野に放たれているわけではない。日本の経営に学んだ人たちは等しく日本に対する尊敬の念と共に、日本大好き人間として日口間の友好の気持ちを抱き続けている。しかし外務省、日本センターとしては、帰国後そのまま関係を切らすことが無いようにしている。データベースもできている。彼らは上述した貧弱な日露経済関係に光を投げかける貴重な仲間たちだからだ。実は彼らで構成する日本センター同窓会というものがある。構成員はセミナーを受講したもので、そして訪日研修生たちである。彼らは日露の経済関係の活性化のために積極的に活動している。定期的に幹部会が開かれ、日口間の経済関係の把握や文化活動のために計画をたて実施している。

以上、紙面の都合上雑駁になったが、またロシア会の方さんにはご報告したいことがある。それはまたの機会に残しておきたい。

(一九六八(昭和四十三年)卒業、丸紅飯田(株)入社。主としてソ連、東欧諸国との繊維貿易に従事。ソ連崩壊後もCIS諸国との物資、食糧、機械、プラント等の取引推進に携わる。二〇〇一年ミルビス日本センター所長。二〇〇四年より、モスクワ大学日本センター所長を兼務すると共に、独立非営利法人日本センター所長。モスクワ滞在期間は通算25年を超える。)

ルーマニアから日本への視線

元国際交流基金日本語派遣専門家

酒井 理恵



ルーマニアがヨーロッパのどこに位置しているか、即座にいうことが出来る日本人は一体どのくらいいるだろうか。いや、EU市民でもルーマニアから地理的に離れた国に住む人々だって似たような感じかもしれない。ルーマニアに行くことになったことを、ルーマニアに行く前に住んでいたフランスで周りの人たちに伝えたとき、彼らの中には「プカレストとブダペストの違いをよく分かっていない者も珍しくなかった。日本人の友人でも私のルーマニア赴任を知らせるメールに対する返事に「ブルガリアに行くんだ。おめでとう。」というようなものや「今度はプカベストか。」というものが混じっていた。位置関係だけでなく、「ルーマニアといえは」という質問をすると、日本では大体「ドラキュラ、コマネチ、チャウシエスク」の三つ以外の答えを聞くのは難しい。

さて、そのルーマニアである。ルーマニアは東は黒海に面し、北はモルド

バとウクライナ、そして西はハンガリーとセルビアそして南はブルガリアと国境を接しており、スラブとマジヤールに囲まれたラテンの浮島がルーマニアである。黒海の方にはトルコが控えており、言語的にも文化的にもルーマニアが様々な要素を混在させているのは想像に難くない。もともとこの地に住んでいたダキア人の言葉はほとんど残っていないが、この地を征服したローマ人の言葉であったラテン系の語彙をベースにスラブ系、トルコ系、ギリシャ系の語彙が入っており、宗教はルーマニア正教(一昔前までは宗教関係の書物はキリル文字を使って書かれていた)を信奉しており、ヨーロッパの中では最も信心深い人が多い国としても知られている。オスマン帝国やハプスブルグ家の支配を受けたこともあったが、南の温暖な気候で食べ物に困ることはなく、美味しいワインとともに人々のはんびりと農業と畜産で暮らしてきた。それがチャウシエスクの政策により飢えたことがなかった国民が飢えた。食べ物への恨みだけではないし、チャウシエスク時代の自国民をながいにする政策の数々は最後にはあの衝撃的な映像が全世界に配信された革命につながるのである。

日本とルーマニアの関係は一九〇二年の国樹立に始まるが、日本語がルーマニアにおいて教育機関で学ばれ始めたのは外務省のデータによると一九七四年である。一説には六八年にすでに

教えられていたという説もあるが、記録を探し当てることは出来なかった。共產主義体制下で日本語を勉強していたルーマニア人はほんのわずかであり、首都ブカレストのブカレスト大学での扱いは副専攻、入学者も四年に一度という限られたものだった。

それが一九八七年から日本語が主専攻として学ばれるようになり、10名の定員で毎年学生が入るようになった。このときに大学で日本語を勉強し始めた世代が筆者の勤務校であったブカレスト大学の主力メンバーである。その後日本語熱はどんどん高まり、今ではルーマニア全土の日本語学習者は千五百名ほどと言われる。日本語を学習できる教育機関も増え、今では首都のブカレストに十校弱、そしてブカレストから北西に五百キロほど行ったクルージュ・ナポカに副専攻として日本語を学習できる大学が二校、その他に二〇〇七年まではJICAの青年海外協力隊が入っていた子供宮殿という放課後に行くクラブのようなところでも日本語のクラスが開かれていた。残念ながらルーマニアのEU加盟によりJICA事務所は二〇〇九年の撤退を決め、青年海外協力隊の派遣も徐々に縮小、地方で日本語が学べるところはほとんどなくなってしまった。

現在大学で日本語を学んでいるルーマニア人が日本語に興味を持つようになったきっかけは、伝統的な文化や日

本語という言語そのものに対する興味のほかに、ご多分に漏れずアニメの影響が大きい。小さいころから日本のアニメとともに育っており、ルーマニアでも広く普及しているインターネットによって今では遠く離れた国の情報を得ることはとてもたやすくなった。学生はネットから浜崎あゆみや「Badly」の曲や日本の映画をダウンロードし、どこにどんな情報があるかは学生同士の口コミで瞬間に広がって行く。テレビでは日本に関するドキュメンタリーが流れることも多く、日本に興味のある学生だけでなく、コンサート会場でもまたま隣りになった若者に茶道について質問されたり、タクシの運転手や港の船員に日本に関する知識を披露されたりすることもある。本屋に行けば世界的に話題の村上春樹だけでなく、吉川英治や田口ランディの小説が翻訳されたものが棚に並んでいる。日本人がルーマニアのことを知っているよりもルーマニア人のほうがよっぽど日本についてよく知っている。

自己紹介が遅くなったが、私は二〇〇四年三月から二〇〇七年七月までブカレスト大学に派遣され、そこで日本語を教えたり、ルーマニア人の先生方や日本からの派遣者と協力して日本語教師会を作ったり、大使館と協力して日本語弁論大会の開催、日本語能力試験の実施などに関わってきた。日本語弁論大会以外の日本語能力試験の実施と教師会の発足は私がいずれも私が任地に

いたころの出来事であり、これはルーマニアでの日本語熱がここ最近さらに高まっていることを示している。勤務校のブカレスト大学では年々入学者が増え、最初は10名だった入学者も、ここ二、三年は毎年50名前後が入学してくる。今年は入学希望者が一四〇名もいたということで、日本語に対する興味はこれからも今まで以上に高まっていくように思われる。

一つのヨーロッパを指すという一連の動きは学制にも影響を与える。国ごとに単位数や学位のシステムが異なる、一口に「学士」と言ってもそれぞれがある国の何に相当するのかわかぬのが難しくなる。そんなわけでルーマニアもボローニャ条約に基づき、二〇〇五年度入学者から学士課程は四年から三年に、そして修士課程は一年から二年になった。それと同時にブカレスト大学では日本関連で修士号が取れる修士課程が設置された。システムが変わっても一年あたりの学習時間が増えるわけではないので、新しいシステムで卒業する学制は学士といっても四年制卒の学士よりも日本語学習時間が一年分そっくり少なくなってしまう。しかし聞いてみると大部分の学生が修士まで取って卒業したいと言っている、実質的には五年間大学にいるような格好になる。

大卒の話ばかりになってしまったので、ここで少し普段の授業風景について



車窓から

手でも二つも三つも外国語を話す人に当たるとも一回や二回ではなかった。このあたり、やっぱり親戚語がたくさんあるヨーロッパは得である。

しかしその調子で日本語も家で宿題も復習もしないで半年もすると、立派なおちこぼれが出来上がる。ルーマニア語では聞いたことがないが、ロシア語には「東洋の言語を勉強するには錫のおしりが必要である」、つまり長いこといすに座って勉強できる者でなければ習得はおぼつかないという言い回しがある。こうして一年生期末試験をパスできない学生は約四分の一。しかし我が大学には留年というシステムがないので全員進級となるが、一年生の学習についてこれらなかつた学生が二年生の授業の単位を取れる確立は非常に低く、やがてクラスからいなくなっていくってしまう。一方本当に日本語に興味のある学生は自分でどんどん勉強を進め、一年の前期が終わった冬休み明けに驚くような作文を書いてくる学生もいる。なんでもそうだが、上達の鍵は教師だけによるのではなく、本人のやる気が必要な部分を占めているのだ。

そうやって日本語を大学で勉強した者の進路はどうか。日本語学習者が実際に日本語を使って仕事をできる可能性は残念ながら低いと言わざるを得ない。もともとブカレスト大学の外国語学部では主専攻と副専攻の二つの外国語を

ほぼ同じ時間数学習しなければならず、個々人の意識の中で日本語の比重が下がってくる場合もあるし、実際問題として日本語を必要とする仕事が毎年の卒業生の数ほどあるわけでもない。EUでは母語以外に二つの外国語に精通することが目標に掲げられているが、それはEU言語であって日本語は入っていない。日本語だけが抜群に出来ても仕事に結びつく可能性は低い。

しかし、われらロシア語を専攻した者のうち、ロシア語を実際に仕事や生活で使っている者は全体からみたらほんのわずかのはずである。だからと言って大学でロシア語を学んだことが無駄だったことは決してないだろう。自分たちとは全く異なった価値観や世界があるということを知ったことで、自分の人生がどれだけ豊かになったことか。実務一辺倒ではない語学や異文化教育がもたらすものはどこにいても同じだろう。

とはいえルーマニアから日本への熱い視線が文化交流的なことにせよ、経済的なことにせよ、何か実際に形を伴った何かに結びつかないだろうか、ルーマニアに住んでルーマニア最前になつた私などはほんやりと考えてみたりもするのだった。

(一九九六平成八〇年学部卒業、博士前期課程平成十二年修了)

劣等生のロシア語劇演出

塚本 恒

昨年五月僕は、演劇サークルに所属ゆえの期待感と、ロシア語劣等生ゆえの不安感を背に受けた形で、ロシア語科の語劇代表になりました。

今となつては恥ずかしい限りなのですが、僕は最初は、『参観日のイベントにはしない!』と非常に好戦的でした。

まず初めに僕らがしたことは、過去の上演をDVDで見ることでした。かもめ、三人姉妹、桜の園・・・名作揃いでしたが、みなの一致した感想は『つまらない』『飽きる』でした。

通常、観客の多くは保護者や他語科の友人です。彼らは、そもそも役者として子供や友人が登場するだけで満足します。しかし、そこに全く縁故のないロシア語もわからない観客がいるとしたら、どうでしょう?今までの作品に足りなかったのは、そこじゃないのか?その人にも、大いに満足して帰って貰おうじゃないか!そんな新しい姿勢を、僕は追求しました。

ストーリーは、わかりやすく、皆で日本語訳の台本を持ち寄り、投票をしました。その結果、上演歴の無いロープの作品が浮上しました。台本が決まると、登場人物の感情を理解しようと日本語で動きをつけていきました。動きを活かして目と目で会話するには、当然台本は早い段階で暗記しなくては

いけません。夏休みにはロシア語での稽古が始まりました。それから本番まで、時には公民館で、時には教室で幾度となく練習を繰り返す毎日でした。どうしても場所を予約できず、皆で公園に出かけて練習をすることもありました。



舞台をおえて

演出をしていると、無力感に襲われることが度々ありました。ロシア語がわからないのです。台本に訳をふり台詞が理解できなくても、ロシア人がどういう動きをしてどういう喋り方をするのか、そればかりは解かりません。ネイティブの先生に何度もチェックして頂き、各役者が一つずつ訂正していききました。演出としての役割を果たせ

ない自分もどかしくてたまりませんでした。

しかし、凹んでいる暇はありません。直前になると、リハの準備、各チームと進捗状況の確認、役者の日程調整、役者として練習：様々なタスクがありました。照明スタッフがつかまらなかつたり、リハーサルで字幕が台詞とずれたり、次々と浮かぶ問題を解決するうちに、瞬間に時間は過ぎていきました。そして、本番がやってきます。

舞台の上で、堂々と演技をする役者、思いのほか湧く歓声。舞台袖にいた僕は、不思議な感覚を味わいました。約半年にも及ぶ練習が、この一瞬のためにあつたなんて。儂いようで、それは無駄ではなかったという、不思議な感覚。

夜明けを迎え、舞台は幕を閉じました。そして、舞台上に並んだ役者たちは大きな拍手を頂きました。でも、あの拍手は役者たちだけではなく、裏方で関わった全員に向けられた拍手でした。

演出なんて、出来なくて当たり前前た今になってそう思います。敢えて言えば、今までに無いものを作ろうと大言を吐き、役者やスタッフと意気投合し、大きな拍手を貰うために汗をかいたこと。あれが僕なりの演出だったのかも知れません。今さらながらですが、僕の酷い語学力を補いつつ、僕の広げた大風呂敷を実現させてくれた語科の皆に、ありがとうと言いたいです。

《キャスト》

- スラウワ 重野史
- リーザ 村瀬摩里子
- ミーチャ 岩田龍樹
- タマール・チモフェエブナ・ザワリーナ 門馬千尋
- グリゴリーイ・スチエパノヴィチ・ガールキン 友田雄大
- ロマン・チモフェエヴィチ 佐藤寛
- アントニーナ・ワシリーエヴナ 菊池愛実
- チーホン・チモフェエヴィチ 伊藤裕太郎
- ヴェーロチカ 中村実穂
- オリガ・ペトロローヴナ・シロロワ 細川伴実
- ワロージャ 塚本恒
- ジェニーヤ 渡邊圭
- 《翻訳》 上田・大西・菅井・坂東・水上・門馬・安本
- 《字幕》 上田・大西・安本
- 《舞台美術》 岩田・上田・大崎・岡・岡田・菊池・栗原・小島・小南・斉藤・友田・中村(志)・中田・根元・坂東・別府・三澤・村田・八尋・吉田
- 《小道具》 一之瀬・小島・谷口・友田・長谷川・橋本・藤田・右田
- 《メイク・衣装》 青木・菊池・中村(志)・細川・三澤・村瀬・三ツ松・吉田
- 《宣伝美術》 安達・池嶋・岡・佐藤(志)・佐藤(寛)・渡邊(知)
- 《渉外》 坂東・岡田
- 《音響》 加藤・永井
- 《照明》 越智・中村(志)
- 《アナウンス》 松田

府中だより

鈴木 義一

外語大の本年度最大のニュースが亀山学長の就任だとすると、学生にとつてそれに匹敵する出来事は、非常勤講師の担当授業が削減され、開講授業が大幅に減ったことです。今年度はとくに三・四年次の講義科目(専修専門科目)の減少が著しく、非常勤講師担当の授業は外語大全体で六分の一になり(六分の一を削減したのではない)、ロシア・東欧課程でも通年換算で一コマあった非常勤講師の授業が二コマ相当まで減ってしまいました。来年度はさらに、主専攻語でも非常勤担当の授業が減らされる見込みです。学部長と学部執行部はこれを、財政的理由と「認証評価」の問題として説明しています。前者は人件費の大幅な赤字ですが、後者については少し説明が必要かと思えます。二〇〇四年に国立大学が法人化された際に、国立大学は七年ごとに文部科学大臣の認定する機関が実施する評価を受けることが義務づけられています。それにより外語大は今年、「大学評価・学位授与機構」による「大学機関別認証評価」を受けることになりました。非常勤講師への依存度が高ければ「適格」との認証が得られないというのです。しかし、学生にしわ寄せをするような形で押し切ったやり方には今でも疑問が残ります。

続いて、昨年十月以降のロシア語専攻に関連するイベントを紹介します。四回目となった「ロシア語週間」は昨年一〇月二四日に開催され、代表団の代表であるS・A・ハヴローニナ教授(ロシア民族友好大学)の講演とF・I・パンコフ講師(モスクワ大学)の公開授業が行われました。

昨年はシヨスタコーヴィチの生誕百年にあたり、亀山都夫教授の司会・プロデュースによるシンポジウムが相次いで三つ開催されました。まず、二月一二日に外語大で開催された「シヨスタコーヴィチとわれら」では、ロシアから招いたシヨスタコーヴィチ研究の第一人者であるマナシール・ヤクーボフ氏とともに一柳富美子氏(和光大学)が講演を行いました。続いて一六日には同じく外語大で「甦るシヨスタコーヴィチ」の国際シンポジウム、一八日には日比谷公会堂で講演と演奏がありました。

今年に入ってからイベントとしては、ロシア文化映画庁長官のミハイル・シュヴィトコイ氏が来日し、七月三日に外語大で「文化の新たな刺激を求めて：ロシア文化・芸術の現状と課題」と題する講演を行いました。

冒頭の「認証評価」の問題に戻ると、多くの国立大学で「評価」をクリアするための数合わせに奔走している現状があります。「評価」の基準とは本来、大学に求められる理念に裏付けられたものであるはずですが、数値目標の達成が自己目的化して理念がおざりにされるのであれば、何のための「評価」なのかという疑問が生じます。新学長の誕生を契機にこうした鬱屈した状況に多少とも変化が生じ、来年の「会報」ではもう少し明るい話題を提供できることを望んでいます。(東京外国語大学准教授)

東京外語ロシア会が再興してから十一年経ちます。その間、新たな会員を迎えていますので、下段に会則を掲載いたします。

東京外語ロシア会会則

- 一九六二年十一月二五日総会決定
- 一九六七年七月八日総会で改正
- 一九七二年七月二日総会で改正
- 一九九七年十一月二日総会で改正

- 第1条 本会は東京外語ロシア会と称する。
- 第2条 本会は会員相互の親睦を図るとともにロシアおよび旧ソ連邦に関する知識を増進することを目的とする。本会は東京外国語学校露語部、東京外事専門学校ロシア科、東京外国語大学ロシア語専攻および東京外国語大学ロシア・東欧課程ロシア語専攻の現旧教官、卒業生および在学生をもつて組織する。
- 第3条 本会は通常年一回総会を開く。その他の会合は臨時にこれを開く。本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終了する。
- 第4条 本会は会員より会費年額2千円または終身会費3万円を徴収する。ただし在学生は会費納入義務を免除される。
- 第5条 本会は通常年一回総会を開く。その他の会合は臨時にこれを開く。本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終了する。
- 第6条 本会の決議は出席者の過半数の賛成による。
- 第7条 本会に以下の役員を置く。
  - 会長1名副会長若干名、幹事若干名、会計監査2名
  - 会長は総会これを選出し、本会を代表する。
  - 副会長は総会これを選出し、会長を補佐する。
  - 幹事は総会これを選出し、会務を分掌する。
  - 会計監査は総会これを選出し、会計を監査する。
- 第8条 役員は任期は3年とし、重任を妨げない。
- 第9条 本会に顧問をおくことができる。顧問は総会の承認を経て会長がこれを委嘱する。顧問は会長の諮問に応ずる。
- 第10条 本会は年一回会報および必要に応じて会員名簿を発行する。
- 第11条 本会の事務局は東京外国語大学内に置く。
- 第12条 地方の事情により本会の支部を設けることができる。



### 会計から

ロシア会の会費は、外語会の会費とは別立てになっており、つぎの通りです。

終身会費

三万円(振込料 三三〇円) または

年会費

二千元(振込料 一一〇円)

納入頂いた状況は左表の通りで、納入者が減少しました。特に終身会費を納入された方が二十名から八名へ激減しました。これにより前年比四十二万余円の大減収となりました。一方、支出は、懇親会への補助が四万円余増し、全体で約六万円増となりました。

### 東京外語ロシア会2006年度収支

(2006年4月1日~2007年3月31日 単位 円、監査実施済)

1 収入	終身会費 (8名、単価3万円)	240,000
	年会費 (延べ70名、単価2千元)	140,000
	寄付金 (1名 1万円)	10,000
	利息	2,569
	合計	392,569
注: 年会費には3千,5千,6千,1万円納入者あり		
2 支出	会報制作費 (印刷製本作業代)	172,685
	会報宛名ラベル (支払先:外語会)	16,000
	会報郵送費	154,117
	霊園管理料 (ミチューリン先生お墓)	3,420
	郵便振替票の印字費 (会費納入用)	1,700
	会議費(06年7月11日)	3,183
	雑費 (払込手数料2件)	840
	懇親会への補助	291,325
	合計	643,270
3 差引計算及び繰越金		
	差引剰余金	▲250,701
	前期繰越金	3,851,373
	次期繰越金	3,600,672

### ロシア会懇親会収支 (2006年11月25日実施、単位 円)

1 収入	出席者会費 (卒業生30名 単価5千元)	150,000
	本会計からの補助	291,325
	合計	441,325
2 支出	料理代 (外語大生協)	400,000
	飲物代 (大久保商店)	40,590
	払込手数料 (2件)	735
	合計	441,325

これらの結果、年間収支は二〇〇三年以来の赤字となりました。

会の活動基盤を維持、強化するため、皆様の一層のご支援をお願い致します。特に終身会費納入および懇親会への積極的参加をお願い申し上げます。

尚、懇親会については、先輩と後輩の交流を図る機会として学生は無料にしようという旧ロシア会 八杉先生以来の伝統を継承し、例年本会計より補助を行っておりませんが、上記の状況から二〇〇七年度懇親会は学生諸君にも一部費用(会費・卒業生五千円)に対し、学生二千元)を負担していただくことになりました。

二〇〇六年度 終身会費納入者 (納入日付順・敬称略)

森田稔、永盛雄一郎、高橋和湖、方波見雅夫、城田俊、樋本智子、米川哲夫、青木武、合計八名

また、故秋山邦博氏のご家族より、ご寄付を頂きました。

ロシア会会計 大浩義之

(追伸) 会報送付の封筒の宛名頭部に〇印のある方は終身会費納入済みの方で払込票は同封してありません。

真の国際人は外語にいた!

藤原正彦氏の大ベストセラー「国家の品格」には明治の国際人として四人の人物が挙げられている。新渡戸稲造、内村鑑三、岡倉天心、福沢諭吉である。ところで慶応義塾の福沢を除き、残る三人の人物が外語に籍を置いていたことはご存知だろうか? 「東京外国語大学史」を編纂する過程で学籍簿を整理しているとき、明治六年の英語科の欄にこれらの名前を発見、狂喜したものだ。藤原氏の著書が出る何年も前のことである。さらに講道館の嘉納治五郎の名前もそこにはあった。

それではわが魯語科(露語科)となるのは明治十年以降)はというと、第一期生には村松愛蔵と黒野義文がいる。村松は恩師メーチニコフの教えを自由民権運動に活かし、露国憲無党(チロードニキ)の影響を受けた飯田事件の首謀者となるが、後に自由党の代議士となり、日糖事件を機に、政界を去り、救世軍に転じた人物。また黒野は外語廃校のあと、二葉亭とともに外語を去り、ウラジオストクでの女郎屋用心棒のちシベリアを徒歩で横断、ペテルブルク大学で30年以上日本語を教授した人物。その教え子にはコンラッド、ネフスキー、スバルヴィン、さらに夏目漱石門下生となるエリセーエフがいたのだ。

(渡辺雅司記)

二〇〇七年度

## ロシア会総会・懇親会のお知らせ

今年度のロシア会総会・懇親会を左記により開催します。今年九月に母校学長に就任された亀山郁夫先生のお祝いの機会ともなります。多数の方々のご参集をお待ちしています。

日 時 11月24日(土)

午後一時から総会

三時から懇親会

総会終了から懇親会が始まるまでの間、小一時間ほどの時間があります。当日は外語祭の期間中です。どうか、在学生たちのイベントや模擬店をお楽しみください。

総会会場 府中キャンパス研究講義棟一〇八番教室

懇親会 三時から 大学会館一階食堂で

学長に就任された亀山郁夫先生からのご挨拶

同窓生、教え子その他の方々のお祝いや激励のスピーチのあと、懇談のときを持ちます

会 費 五千元(卒業生)

二千元(在学生)

ロシア語劇はゴーゴリ作「鼻」です。ロシア会開催当日18時からマルチメディアホールで上演します。懇親会のあとご覧ください。

ロシア語専攻  
専任スタッフの紹介

亀山郁夫教授が学長に就任したことに伴い、総合文化講座は私(渡邊雅司)ひとりになってしまいました。しかもわたしも一年後には定年となるため、ロシア語専攻の教員スタッフは危機的な状況にあります。できる限り早急に後任人事を起こせるよう追求しておりますが、独立法人化以後の人件費の削減で、非常勤講師をなんと550(！)コマも削るといふ愚行を強いられており、予断を許しません。亀山新学長のもと、人事の見直しがなされることを期待したい。

言語・情報講座 中澤英彦教授

四田 剛准教授

総合文化講座

渡邊雅司教授

地域国際講座

高橋清治教授

客員准教授 鈴木義一准教授

ガリーナ・滝川・ニキパレツ

なお長年にわたってロシア語作文や

ロシア語会話を担当いただいたタマラ・原先生は今年をもって定年退職となります。会員の中にはあの名調子の日本語で皮肉られたり、しかられた人も多いと思います。ロシア会にはお呼びしたいと思えますので、亀山学長のお祝いとならんで、タマラさんへの

感謝の会にもしたいと思っております。  
(渡邊雅司記)

## 編集後記

この九月から学長の重責を担うことになられた亀山郁夫先生に巻頭言をお書きいただきました。困難の山積する状況のなかで、母校が本来持っている実力をアピールし、「グローバル化時代の世界に関する人文学的知の一大センター」に育てる覚悟という言葉に感ずる決意を感じました。今年のロシア会には是非大勢の方が出席されますように、また、出欠のお返事に亀山先生へのメッセージを書き添えてくださればと存じます。

多くの方が興味をお持ちの、最近のロシアの経済、政治、日本との関係などについて詳しい文章を朝妻幸雄氏からいただきました。

若い卒業生、酒井理恵さんのルーミアでの日本語教師体験記も興味ある読み物です。

一九九七年の東郷正延先生の卒寿のお祝いがきっかけとなってロシア会を再興、翌年に会報を復刊1号として発行、毎年号を重ねて10号となりました。多くの方々のご協力を感謝いたします。

(昭34卒 町田裕子)